

同調を促すのは対立なのか、災害なのか

○ 梶田みな美^{1,2}・中西大輔²

(¹ 日本学術振興会特別研究員・² 広島修道大学)

目的

人類はさまざまな外的脅威に対して、相互に協力することで対処してきた。理論的には、他者の協力をただ乗りすることが合理的であり (Olson, 1965)、協力行動の成立を説明することは困難だとされる。この問題に対し、多数派の行動に過度に同調する多数派同調バイアス (Boyd & Richerson, 1985) が協力を促進する可能性が論じられている (Boyd & Richerson, 2005)。しかし、協力行動の文脈において、このバイアスが実際に発現するかどうかは十分に解明されていない。

先行研究では、脅威のない単一の集団状況で協力が求められる場合、多数派同調バイアスが発現しにくいことが示されている (Natsumeda et al., 2023)。一方、外的な脅威 (たとえば、集団間葛藤や自然災害) が存在する状況では、同調によって協力行動が促進する可能性がある (Gelfand et al., 2011)。しかし、外的脅威の種類が多数派同調バイアスにどう影響するかは十分に明らかではない。本研究では、(1) 集団間で対立する状況、(2) 相手集団を必要としない自然災害に代表される状況 (閾値公共財) を比較し、それぞれで多数派同調バイアスが観察されるかどうかを検討した。

方法

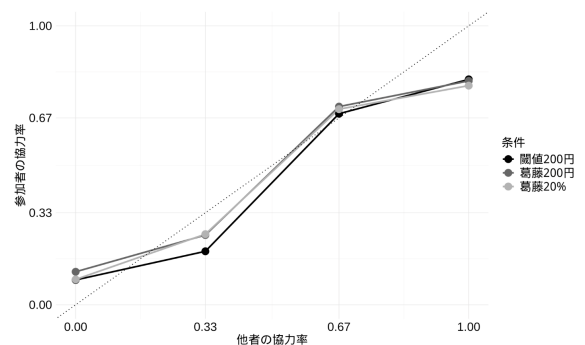
参加者 クラウドワーカー452名 (男性220名、女性226名、その他6名) を対象とした。

手続き 参加者は、集団で協力が求められる状況 (社会的ジレンマ) を描いたシナリオを読んだ後、次の3条件のいずれかに無作為に割り当てられた。【閾値200円】グループ全体の寄付金が基準額を超えると、各成員は+200円を追加で獲得する (下回ると-200円)。【葛藤200円】相手集団より寄付金が多いと+200円 (少ないと-200円)。【葛藤20%】相手集団より寄付金が少ないと20%を失い、その分が寄付金の多い集団に分配される。説明を読み終えた後、参加者は他者情報のない状況で元手1000円を寄付するか否かを決定した。次に、他者情報が4パターン (他者協力率が0%, 33.3%, 66.7%, 100%) 提示された上で、元手を寄付するか否かを再度決定した。

結果

多数派同調バイアスの指標 D^* が正の値になれば多数派同調バイアス (S字型同調)、0であれば比例的同調、負の値であれば非多数派同調バイアス (逆S字型同調) を示す。 D^* が有意に正となるかをブートストラップ法 (100万回) で検討した。その結果、全ての条件で多数派同調バイアスが観察された (閾値200円: $D^* = 1.71$, 95%CI [1.17, 2.23]; 葛藤200円: $D^* = 1.57$, 95%CI [1.07, 2.06]; 葛藤20%: $D^* = 1.46$, 95%CI [0.99, 1.93])。また、二項検定により他者協力率と参加者の協力率の差を検討した結果、どの条件でも他者協力率が33.3%の場合に参加者の協力率はそれを有意に下回った ($ps < .05$)。

Figure 1. 各条件の協力パターン



考察

本研究では、集団間の対立を伴う状況だけでなく、自然災害のような非対立的状況でも多数派同調バイアスが観察された。さらに、そのバイアスの形はどの条件でも一貫しており、非協力者が多数派の場合、個人はその割合を下回る確率で協力していた。これらの結果は、外的脅威下で他者の行動に影響され、非協力的な状態に陥ることを示唆する。一方、現実には脅威下で社会的な影響が協力行動を促す場面もある (デモ活動の拡大、感染症対策など)。今後は、脅威下で多数派同調バイアスが協力を促す要因を特定する必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、横田晋大先生 (広島修道大学) から有益なご助言を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。